

紹介

ピーター・マクフィー著（高橋暁生訳）

『ロベスピエール』

「彼は、あたかも脳みそが歩いているがごとく、統一的で完全無欠な思想の代弁者であるかのように書かれることがあまりにも多く、情熱と当惑を抱え、堅い決心をしつつも自信がなく、国家的舞台と『故郷』への思慕に板挟みになっている、そういう一人の若者として描かれたことはなかった」（本書三五八頁）。「彼」とは、フランス革命期に活躍したロベスピエールである。「史林」の読者ならば、名前と活動の概要ぐらいは、とうの昔にご存じだろう。しかし読者がロベスピエールに対して抱かれるイメージもまた、程度の差はあれ引用文の前半に近いものではないだろうか。本書は、そうしたロベスピエールを引用文後半にあるような「等身大の若者」として描き、その人物像を世に問うべく出版された。著者はオーストラリアの歴史家ピーター・マク

フィー。フランス革命史研究では世界的に有名な人物であり、本書は革命史の専門家が著した伝記ということになる。

紙幅の都合上、各章のタイトルは省略するが、手にとって頂ければ分かるように、どれも個性的で目を引く（例えば第六章は「アウゲイアースの家畜小屋掃除に挑戦しながら」。大まかな構成を述べるならば、序章は方法論の紹介、第一章から第十二章まではロベスピエール出生から死去までの生涯、終章は没後の評価を論じている。特徴的なのは、これまでに出版されたロベスピエールの伝記（ただし日本語で読めるものは、意外にも、多いとはいえない）とは異なり、本書が、第一章から第四章に至るまで、かなりの頁数を割きつつ、少年時代から青年期にかけて、すなわち革命が始まる以前のロベスピエールを詳解した点である。当然、革命以前は史料が不足しているが、それを補うため、マクフィーはロベスピエールの生まれ故郷であるアラスの「環境」を分析し、家族を巡る状況にも目を配りながら、彼の人格が形成される過程を語った。その結果表れたものは、母の死、父の失踪に打ちのめされながらも、誠実に学

問に向き合い、ときに異性に恋心を抱き、一方で法律家として出した結論に悩み、苦しむ若者の姿であった。

革命期に入っても、一次史料を駆使しながら「等身大」のロベスピエールを描こうとする試みは止まらない。ここで注目されるのは、革命という大転換の時代を渡り歩き、やがては恐怖政治の責任者として昇りつめていくロベスピエールが、国王や、かつての仲間たちの処刑を目のあたりにし、疑問や後悔の念を抱いたり、体調を崩したりした点である。おそらくはストレスが原因であろうが、彼がここまで頻繁に体調不良を訴え、意気阻喪していた点は、その人物像を考える上で、見過ごせないだろう。没後の評価に関しても、紹介者は本書を読了して、初めて知ったことが多かった。それらは「記憶の歴史」の一大テーマを構築しうる知見である。このように本書は、「冷徹にして完全無欠」なイメージを持つロベスピエールの新しい姿を描き出すことに、かなりの程度で成功している。そしてマクフィーと同様、フランス革命史研究の最前線で活躍する高橋暁生氏の翻訳は非常に読みやすく、読み手への配慮にも満ちて

いる。トータルでの完成度は高い。本書を通して、今までになかったロベスピエール像に触れて頂ければ、革命史研究者の端くれとして、とても嬉しい。是非ともご一読を。

(四六判 三七八頁＋六一頁 二〇一七年三月)

白水社 税別三六〇〇円)

(山中聡 東京理科大学講師)